

氏名	李 知殷
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第411号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	陳述副詞の史的研究—推量を表す副詞を中心に—
審査委員	(主査) 沖森 卓也 鈴木 彰 木村 一 (東洋大学文学部准教授)

# I 論文の内容の要旨

論文名……陳述副詞の史的研究—推量を表す副詞を中心に—

## (1) 論文の構成

### 序 章

第一節 研究の目的

第二節 先行研究の概観

一 山田孝雄(一九三六)

二 時枝誠記(一九五〇)

三 渡辺 実(一九七一)

四 工藤 浩(二〇〇二)

第三節 本研究の立場

第四節 研究方法

一 文献資料及び時代区分

二 研究対象及び分析の方法

### 第一章 「きっと」について

第一節 はじめに

第二節 中古から近世における「きっと」の変遷過程

一 中古

二 中世

三 近世

第三節 明治期以降における「きっと」

第四節 「きっと」とその周辺

第五節 まとめ

### 第二章 「おそらく」について

第一節 はじめに

第二節 上代の「おそるらくは」

第三節 中古から近世における「おそらく」の変遷過程

一 中古～中世

二 近世

第四節 明治期以降における「おそらく」

一 「おそらく」の共起形式

二 「おそらくば」の出現

第五節 まとめ

### 第三章 「たぶん」について

第一節 はじめに

第二節 中世から近世における「たぶん」の変遷過程

一 中世

- 二 近世
  - 第三節 明治以降における「たぶん」とその周辺
  - 第四節 まとめ
- 第四章 「おおかた」について
  - 第一節 はじめに
  - 第二節 中古
    - 一 「おおかた+α」類
    - 二 単独で現れる「おおかた+⊖」類
  - 第三節 中世
  - 第四節 近世
  - 第五節 明治以降における「おおかた」
  - 第六節 まとめ
- 第五章 「たいてい」について
  - 第一節 はじめに
  - 第二節 「たいてい」の語源及び出自
  - 第三節 中世から近世における「たいてい」の変遷過程
    - 一 中世
    - 二 近世
  - 第四節 「だいたい」の用法
  - 第五節 明治期以降における「たいてい」と「だいたい」
    - 一 「たいてい」の使用様相
    - 二 「だいたい」の使用様相
  - 第六節 まとめ
- 第六章 「たいがい」について
  - 第一節 はじめに
  - 第二節 中世から近世における「たいがい」の変化過程
    - 一 中古・中世
    - 二 近世
  - 第三節 明治以降における「たいがい」
  - 第四節 まとめ
- 終章 陳述副詞への進化
  - 第一節 副詞における推量性の発生時期
  - 第二節 推量的意味の陳述副詞への傾斜

【参考文献及び資料一覧】

【参考資料】

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、日本語史において、副詞、特に推量的意味を表す陳述副詞がどのような経緯を経て使われはじめ、現代に至っているのか、その変遷過程を追いながら、そこに見られる推量的意味の発生時期や陳述副詞化への傾向性などについて考察したものである。

序章では、副詞の歴史的研究の必要性など、研究目的を明らかにし、従来の研究を通じて陳述副詞はどのように位置づけられてきたかを概観する。その上で、本研究の立場や分析方法などを示す。

第一章では、「きっと」について考察する。中古に様態副詞として「きと」が使用されていたが、中世前期に入って促音を介した「きつと／きっと」と表記されるようになり、中世後期以降からは推量表現を伴って、ある行動や事態に対して間違いなく行うという話し手の判断を推量する意となり、時代とともに陳述副詞として定着していった。

第二章では、「おそらく」について考察する。「恐れることには」のような意を表す連語「おそるらくは」から、中古において「おそらくは」という語形に変化し、中世には〈はばかりなく〉〈事態が起きる可能性が高い〉の意を表すようになり、その後期には副詞として条件表現などと絡み合いながら、推量的意味を強めたこと、近世以降はさまざまな文末表現と共起するようになり、陳述副詞として定着していったことを明らかにする。

第三章では、「たぶん」について考察する。中古から中世前期には名詞性が強かったが、中世後期には副詞として事柄や事態に対して〈その可能性が強いさま〉の意を表すようになり、近世には推量表現とも呼応するようになって陳述副詞化していったと述べる。

第四章では、「おおかた」について考察する。中古にすでに名詞・形容動詞・副詞として用いられており、特に、副詞としては概括的という意を表すようになって、推量表現や否定表現と共起しはじめることを指摘する。その後、多様な推量表現と共起しつつ、近現代には陳述副詞として定着するようになったと記す。

第五章では、「たいてい」について考察する。中古以降、名詞や副詞として用いられ、近世には形容動詞としても使用されたが、次第にその機能が衰退していくとする。いずれも、主として否定文とともに用いられ、現代語でも「たいてい～ ではない」という慣用表現として使用されていること、否定文において〈普通程度でなく、まったく〉の意を、肯定文では〈普通程度ではなく、たいそう〉の意を、節や断定文の中では〈すべてではないものの、ほとんど〉などの意を表すこと、明治以降は推量表現と共起するようになり、それが推量的意味を表す陳述副詞へのステップと見られることなどを明らかにする。

第六章では、「たいがい」について考察する。中古に〈物事の大筋となる部分、あらまし〉などの意を表す名詞として用いられ、中世前期には形容動詞や副詞も生じさせること、特に、副詞としては、近世前期に話し手によってある事柄や事態が起きる可能性を推量する意を表し、後期には推量形と呼応するようになって、明治以降推量の陳述副詞的性格を一層強めていったと述べる。

終章では、推量的意味を表す副詞がどのような由来を持っているのか、いつ頃から陳述性を生じるようになったのかといった陳述副詞となる変遷過程について、さらには、その変遷過程における条件節との絡み合いや、否定表現・意志表現との結びつきに関する傾向などを、各章における考察に基づき総合的に論じる。

## II 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の陳述副詞のうち、推量表現と呼応する副詞について共起関係が形成されていく過程を克明に追い、その変遷過程の傾向について新たな展望を提示するものである。陳述副詞の研究は、従来現代語について言及されるに止まっており、歴史的研究は明治以降について若干取り上げられるに過ぎないのが現状である。もとより現代語法を解明する上で、その歴史的背景を明らかにすることは必須の課題である。そこで、陳述副詞がどのように形成されたのか、そのうち、推量の意を表す「きっと」「おそらく」「たぶん」「たいてい」「たいがい」が推量表現と呼応するに至る歴史的変遷についての解明に取り組んだのが本論文であり、それぞれの語史について実証的に記述しえた点で大きな研究成果を収めたものとして高く評価できる。

まず、それぞれの語において、副詞としての用法が出現し、それが程度的意味を帯び、さらに推量表現と共起するようになったという変遷過程を明瞭に跡づけることに成功している。「おおかた」は中古に、「きっと」は中世後期に、「おそらく」「たぶん」は近世前期に、「たいがい」は近世後期に、「たいてい」は明治において陳述副詞化していったことを指摘した意義は大きい。陳述副詞の史的形成という面から辞書や文法書などの解説や挙例のしかたに今後大きな影響を与えるものと見られる。

次に、陳述副詞化していく過程で、否定表現や、「～ば」などの条件節を伴う場合が多いこと、推量表現と共起する前後に「～う／よう」「～ましょう」などの意志表現と共起する傾向が強いことを明らかにした点も高く評価される。可能性を意味する表現と強く結びつくことで、推量的意味を強め、その結果陳述副詞として確立されていくといった変遷の過程を、一つの傾向として跡づけることができた点は価値が高い。

また、副詞としての語形の変化を語史的に位置づけることができた点も注目される。動詞ク語法の「おそらく」から「おそらく」への語形変化に副詞用法の成立を想定するという見方や、漢字「大体」が漢音読み「たいてい」という副詞として古くから用いられていたのに対して、中世末期ごろの漢音・呉音の代替現象に伴って呉音読み「だいたい」の使用が見られるようになり、「たいてい」が陳述副詞化した明治になって副詞用法を獲得するようになったという指摘などは、今後の語史研究にも大きく寄与するものである。

以上の点から見て、本論文は今後の陳述副詞の史的研究に大きな影響を与える高い水準にあるものと認められる。ただ、その一方で、作品の底本に関する扱い、また、時代が下れば、漢文訓読系資料など、さまざまなジャンルの作品についての調査など、手薄な面も認められるが、今後さらに資料の質を高めつつ、量的にも調査を拡大していくことで、さらに確実さを増していくものと思われる。このような今後に残された課題もあるものの、本論文は、陳述副詞化する過程を実証的に跡づけ、その史の変遷の究明に果敢に取り組んだものとして、その価値と意義は大きい。多くの資料を精力的に博捜し、大量の、さまざまに錯綜する用例を分析し、位置づけることに成功していること、その分析から得られた数々の事項は注目すべきものであり、かつ、陳述副詞の史的 연구를今後進展させ、斯界に大きな成果をもたらすであろうことを期待させるものである。

よって、本審査委員会は、本論文を学位に相当する優れた研究と認めるものである。